光翼閃輪偽天争！

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
光翼閃輪偽天争！

【Ｎコード】
Ｎ０１２０Ｅ

【作者名】
雨月

【あらすじ】
第三十七回光翼閃輪偽天争参加者、バレルバレットをゴミ箱からサルベージした十七歳の青年は人の良さから彼女の協力者を探すが……

プロローグ／第一章　第一話（前書き）

??「はい、始まりました～第三十七回光翼閃輪偽天争！参加者はどういった日々を過ごすのでしょうか！」

プロローグ／第一章　第一話

プロローグ、
「人類っていつ滅亡するとおもう？」
一人の少年がそんなことを尋ねる。
「あ～？そりゃ、滅亡するときに滅亡するんじゃねぇのか？」
もう一人の少年はどうでもよさげにテレビ画面を眺めていたのだった。
同時刻、
「ん～！ん～！！ん～！！！」
ゴミ箱から二本の足が生えており、その二本の足は何かを求めるようにふられており、どうやら助けを求めているように見えたが、近くには誰もいない。
同時刻、
「今年も始まりましたね？」
輝く翼を持っている清楚な女性が椅子に座っている女性に話しかける。
「そうね、第三十七回だったかしら？」
さして興味もないように女性は本に手を伸ばして呟いたのだった。

同時刻だが、まったく別の場所でそれぞれの思いは交錯しており、まったく関係ないものと言っても良かったのかもしれない。しかし、続いていく日々は永遠とあり、地球は存在する限りまわる……

一、
幼馴染の友人、石井誠（いしいまこと）の家から帰ること、数分……
「ん～！！！！！！ん～！！！！！！！」
なんかいた。
何故、ゴミ箱に頭からつっこんでいるのか？何故、自分で出ない

のか……様々な疑問を抱いたのだが、とりあえず助けてやることにした。
「おい、ちょっと動くのやめてくれないか？引っ張ってやるから」
「ん？んん～♪」
どうやら声は聞こえたようで……俺はその人物の足を掴もうとすると、声を聞いた。
『いいのかしら？』
「え？」
目の前にいたのは……女性で、美しかった。ただ、彼女は俺から見たら反対……つまり、ゴミ箱に入っている人物みたいに天へ足を向けている。その姿が透けて見えるのは彼女が人間ではないからだろう。
刹那の間にそんなことを考えた俺は急に現実へと戻された。
『助けるということは多かれ少なかれ影響を受けるの』
「え～と、助けるなって忠告してくれてるんですか？」
気がついたら敬語になっていたのだが、そこはあれだ、相手が年上みたいだからな。
『あなたの自由よ。だけど、このままこの子が足を振りまくっていればいずれ役立たずになるわ』
「……どっちなんですか」
暗に助けろと命令されている気がしてならないのだが、まぁ、その、あれだ。
俺は不安になってきているであろう足を掴み、引き抜いた。
すぽん！
それはまるで封印されていた聖剣のように一瞬だけとても輝いたのだが……次の瞬間には輝きは消えてそこにいたのは俺よりちょっとだけ幼そうな顔をした女の子だった。びっくりするぐらい軽いのは片手で彼女を持っていることだ。

「いや～びっくりしました！あ、助けてくれた人ですか？ありがとうございます」
「あ、いやいや……」
まるで風船を持っているような感覚に襲われたのだが、とりあえず、相手を下ろすことにしよう。
「なぁ、助けた側としては一つ聞きたいんだが……ちょっといいか？」
「？はい、なんですか？」
「……なんで、ゴミ箱に入っていたんだ？」
――――
ゴミ箱に入っていた謎の少女はバレル・バレットというそうだ。バレルは天使になるために人間界に来たそうで……こっちにやってくる過程で座標ミスをした結果がゴミ箱に出てしまったそうだ。
「天使って人間界にこれたら天使なのか？」
「いえいえ、違います」
俺のふとした疑問にバレルは一つ咳払いをして答える。
「……期間があって、その間ずっと人間界にいれば天使になれるんですよ」
「成る程……意外と簡単なんだな？」
そうでもありませんとバレルは口を開く。
「女神様が悪魔を雇って私たちを襲うようにと命令しちゃいましたし、それらを撃退するか逃げるかのどちらかをとらないといけません」
「何でそんなことするんだ？」
たずねると彼女は首をかしげる。
「え～と、私は一度も女神様にあったことがないんですけど……きっと、ドジな天使を作らないようにドジな天使候補生を落とすためじゃないでしょうか？」
「ふ～ん？」
なら、ゴミ箱に出てしまったバレルはアウトじゃないのだろうか

とおもいながらも、ルール上は悪魔に連れて行かれたらいけないのだろう、きっと。
「それで、人間界の協力者をこれから探さないといけないのです」
「あ～成る程な～」
所詮は他人事……俺の右耳の穴から左の耳穴からその言葉は通り過ぎていったのだった。
「それなら、俺がその協力者の家を探すの手伝ってやろうか？人間界、はじめてなんだろ？」
俺は別の場所に言ったりするとすぐに迷子になったりするのでやはり、必要だろう。
「え！いいんですか！？」
目を輝かせながらそんなことを言ってくる……
「まぁ、暇だし、ちょびっとばかりそういう世界にあこがれてたからな。そういうゲームも結構持ってるし……」
「へぇ、ゲームですか？私も人間界に来たらゲームやってみたかったんですよ」
ニコニコしながらそんなことを言う。うん、可愛いなぁ、とおもいながら俺はバレルと一緒にバレルの協力者を探しに言ったのだった。
――――――
「で、バレルの協力者ってどんな姿をしているんだ？」
「え？知りませんよ？これからそれを探しにいくんですから……」
どうやら、語彙があったようだ。俺の中では既に明確となっている協力者の家までバレルを連れて行くだけだとおもっていたのだが、彼女の中ではその協力者さえ決まっていなかったようだ。
「……なぁ、一ついいこと教えてやろうか？」
「え？何ですか？」
お花畑をイメージさせるような笑顔をこちらに向けるが、こいつはあれだ……

天然だ！！

こんな天然が人間界で過ごせるとは絶対に思えない。人間界をなめるなと俺はバレルに言いたかった。

「……絶対にお前、協力者は見つからないとおもうぞ？」

「え？大丈夫ですよ、あなたみたいにいい人、絶対にいますから……」

俺はこのとき悟った……こいつ、間違いなく女神とやらが放った悪魔たちより先に路頭に迷っておじゃんだろうなぁ……と。

「まぁ、なんだ、とりあえず……休憩しようぜ？」

まだつかれてませんよ？と言っているバレルを引っ張って俺は自宅へと向かった。

第一章　第二話（前書き）

??「おっと、未だに実況の私の名前が??のままだぁ～これはどういうことだ?え?本編で出るまでこのまま?で、でも、予定として私が出る機会ないみたいなんだけど?と、とりあえず、第二話どうぞ！

第一章　第二話

二、

「へぇ、ここがあなたの家なんですか～」

のほほ～んとした調子でそんなことを言う、ゴミ箱から現れた天界の住人、バレル・バレット。金髪に翡翠色の瞳の少女を家の中に入れ、俺はとりあえず緑茶を出しておいた。

「え～と、甘いものとか大丈夫か？」

「ええ、大好きですよ♪嬉しいですね～ちょっと人間界不安だったんですけど、あなたみたいな人がいるってことだけで嬉しいですね～」

ほぉ、過ごした時間が一時間ぐらいでのほほ～んとしている天然だとおもっていたが不安を感じていたんだな？

「不安？どんな不安を抱いていたんだ？」

「えっとですね～……お茶菓子に辛いものを出すとか～……」

油断大敵だな……ちょっと油断するとこいつはぼけるからな……

――――

「いや～ゲームって面白いですね～」

相手をハメコンボでボコボコにしながら隣でそれを見ている俺に笑いかけてくる。む、これほどの腕前を見るのは久しぶりだな。

「あ、こっちのゲームは何ですか？」

「ああ、それか？それは友人が置いていった恋愛シュミレーションゲームという奴だ」

興味を持ったのか、それを開ける。俺はまだそれをしていないのでどういうものかわからないのだが、格ゲーを取り出すとそっちをセット。

「するのか？」

興味を持ったのか説明書を読んでいる。どうやら学園もののようだな。

「ええ、させてもらいます！見事ハッピーエンドまでもって行きたいとおもいます！」
ファイル名をバレルとつけるとバレルはゲームをスタート。
「主人公は転校するところから始まるみたいですね？」
画面にはバレルが言うように優男が自己紹介をしているところだった。
じゃ、以下はバレルがやってるゲームの中身でどうぞ。ああ、主人公の名前は一応バレルってことにしておくから。
――――
バレル
「はじめまして、バレルです。これから色々とわからないことがあるかも知れませんが、お願いします」
先生
「はい！では、バレル君は悪いけど……」
（どうせ、一番後ろの席とかそういうのだろ？ほら、後ろの席に不自然に開いてる席があるみたいだぜ？）
（でも、この先生も攻略できるみたいですよ？あ！早速選択肢が！）
A、先生に従う
B，そこに開いている席に座る
（Bにいきましょう！）
（どうぞ、ご自由に……俺がやってるわけじゃないから）
バレル
「先生、僕、そこの開いた席がいいんですけど……ちょっとまだ先生ぐらいしか話せる感じの人がいないので……」
先生
「え？そ、そうね、わかった」
（おいおい、先生の今の態度は何だよ？早すぎじゃねぇか？）
（わかりませんよ？意外とかっこいいなぁとか主人公のことをおもっていたかもしれません）
先生

「じゃ、休んでいる田中君の席を後ろにして、バレル君は今日からここね？」
バレル
「はい！先生、よろしくお願いしますね」
（田中君の席が後ろに行っているが、主人公が座るはずだった席の隣の女子生徒が面白くなさそうな顔してるぞ？そっちがメインヒロインじゃねぇのか？）
（いえ、私的にはやはりサブから攻略していきたいんで……）
一時間目の授業は終わり、僕の始めての休み時間がやってきた。
誰かに話しかけることにして……
A、僕は近くの女子クラスメートに話しかけた。
B、先生に授業について話しかけることにした。
（先生ルートならBだな？）
（そうですね、ですけど今回はAを選びたいとおもいます。なんだか罪悪感を覚えちゃいました）
バレル
「えっと、次の理化室ってどこにあるのかな？」
話しかけられた女の子
「え？え、ええとそれは……」
先生
「あら？理科室？私が教えてあげるわ、バレル君」
（……先生が割り込んできたな？）
（やっぱり二股をかけようとしたのが失敗だったようですね、一瞬ですが先生の瞳の奥に暗い光を垣間見ました……）
先生
「さ、こっちよ」
バレル
「あ、先生……」
A、手を繋ぐ
B、心を繋ぐ

（おい、ＡもどうかとおもうがＢのほうはまったく理解できんぞ？）
（じゃ、Ｂにして見ますか？）
（ま、俺のことじゃないから……）
バレル
「先生、先生とは心がつながってますから大丈夫です」
先生
「ば、バレル君……ちょ、ちょっと先生用事思い出しちゃいましたわ！ご、ごめんね？」
バレル
「……こほん、理科室、結局わからなくなったから教えてくれないかな？」
話しかけられた女の子
「え？う、うん！」
（すげぇ、この主人公様々な修羅場を潜り抜けてきた猛者か？）
（すごいですね～）
――――――
開始一時間ほど経って、主人公バレルは登場してくる女の子にちょっかいを出しまくったり、もうどれほど浮気をしているのかわからなくなってしまっていた。
「そろそろ佳境ですね？」
「いや、既に泥沼状態だろう？」
――――――
バレル
「……また、無言電話……」
母
「バレル、そろそろ警察へ……」
（ほら、どう考えてもこれは犯罪レベルだぞ？）
（ちょっとやりすぎましたね）
Ａ、あと一日待ってみる
Ｂ、今すぐ警察へ！

（あえてここはAを選びます！神様、お願いします！この主人公にハッピーエンドを！）
（浮気者にか？どう考えても地獄逝きだと俺はおもうけどな？）
バレル
「いや、あと一日待って、知り合いにそういういたずらしてくる奴がいるから……じゃ、お休み」
母
「そう？こまったお友達ね？だけど、それなら仕方がないわね……友達は選びなさいよ？」
（うぉい！お母さんも心広い人物だな？俺だったら行くぞ）
（ま、色々とあるんでしょうね？）
僕は布団の中に入ると……そこには人肌のぬくもりがあった。
バレル
「え？」
先生
「ここまで来ちゃった♪いただきま～す！」
――――――
俺は画面に映し出されている『あなたは盗られました』というENDになんともいえない気分となったのだった。
「ただいま～兄さん、ちゃんとお昼食べた？」
「や、やべぇ！妹が帰ってきた！」
「え？」
あわててゲームを消し、ソフトを箱に戻してバレルを抱えると俺は裏口から家を飛び出したのだった。ううむ、あのゲームは友人に返さないといけないな。

第一章　第三話（前書き）

？？「未だになんかやってるような感じがしていませんが……これからどんどん天使候補生たちには難題が降りかかっていく予定です！そして、私の名前も未だに不明！これはゆゆしき事態です！」

第一章　第三話

三、

「えーと、何であなたの妹さんが帰ってきたらゲーム、消しちゃったんですか？」

のほほ～んとした調子でそんなことを言ってくるが、それにも理由がある。

「……妹はああいうゲームが嫌いなんだ」

「ああいうゲーム？」

「さっきやってたようなゲーム。ありえないだろってつっこみたくなるだろ？あんなにとんとん拍子にいくようじゃないって言う夢も希望もないようなことばっかり言うんだぜ？置いてただけで俺のことを不潔扱いだ。たまったもんじゃない」

まぁ、内容は確かにたまったものじゃなかったがな……

「はぁ、とりあえず……ここまで来ればあの妹さんも追いかけてこないとおもいますけど？」

「そうだな、少々走りすぎた……はぁ」

今までバレルを抱いて走っていたのだからさぞや見ものだっただろう。

「っと、気がつきゃ夕方だし……結局、お前の協力者は今日中に見つけられなかったな？」

俺がそういうとバレルはまるで他人事みたいに頷く。

「そうですね～やっぱり人間界って言うのは恐いところなんですね？」

ここに来てようやく理解できたかと俺はおもったのだが……

「あんなにのめりこむようなゲームがあるとは恐いものです！」

そっちか？そっちじゃないだろう？路頭に迷ったらご飯も何も食べれないんだぞ～……と、言ってみたところ彼女は着ている白い服をがさごそと探り始める。

「えーと、実は厄介になるところだけは決まっているんです。ほら、まだこの封筒を開けてませんけど……」
俺は絶句した。
「その封筒に入っている名前の奴が協力者じゃないのか？」
「……ああ、確かにそうですね♪あなた、頭いいですね～」
バレルは手をぽんっと叩いて頷いた。
「……」
「ええとですね、協力者さんは一番相性がいい人が選ばれるんです……選び方は女神様が決めるのですが、聞いた話では初対面ながらも息のあった行動が出来るとか♪」
「へぇ、けど女神様はなんでもする人なんだな？」
悪魔雇ったり、天使を決めるとても大事そうなことを人間界で決めるとかさぁ……
「ええ、とてもすごい方だっておねえちゃんもいってました。お姉ちゃんは女神様がいるから世界は回っているんだといってましたよ？あれは狂信的なまでにすごかったですね～♪」
どうやらバレルには姉がいるようで、その人も女神を崇拝しているようだった。
「さて、話がわき道に逸れちまったが……結局のところその相手は誰なんだ？早くいって事情を説明したほうがいいんじゃないのか？それとも、相手は既に事情を知っている相手なのか？」
封筒に手をかけるバレルは首をかしげる。
「さぁ？天使になりたいと思っている人たちに与えられる情報は少ないですからね～最後に食べてくる食事の内容もわかりませんでした……えっと、私の主となる人は……」
そこに書かれていた文字は……
『生野　雪人』
思わず、絶句しちまった。

「う～ん、雪の人？雪山にいるんでしょうか？私の主は？」
「……俺」
「え？何ですか？」
「俺だって」
「？」
俺は不思議そうな顔をしているバレルの肩を掴んで言った。
「俺が生野雪人じゃぁぁぁぁぁぁ！！！！」

――――

母親にどう説明しようか迷っていた。
「マスター、夕日が綺麗ですね～」
「……ああ、明日もきっと綺麗な夕日になるぜ？」
父親にどう説明しようか悩んでいた。
「マスター、商店街のおばさんたちが微笑んでくれてますよ～？」
「……あれは俺たちを見て懐かしんでるんじゃないのか？」
妹に……どう言い訳しよう。
「あら、雪人じゃない？」
「あ、か、か、母さん……」
そこに立っていたのは鬼……ではなく、俺の母さんである生野良子だ。さて、どういった風にいいわけをしようか？あれか？ダンボールにはいってて風邪ひきそうだったからつれてきたとか、にんじんあげたらなついたとか……
「手を繋いでるその子がバレルちゃん？」
「あれ？バレルのこと知ってるの？」
「勿論よ～ああ、そういえば雪人には話してなかったわね、いっつも自分の部屋にいっちゃうんだからこまったものよね……」
母さんのお叱りを道の真ん中で受けながらも、俺は大体の事情を察することが出来た。どうやら、外国からホームステイでやってきたということになっているらしい。知らないのは俺だけで、一週間

ほど前に夕食のせきで話したそうなのだが、俺の記憶の中にはない。
「なんだ、別に気張る必要はなかったのか……まぁ、考えればいきなりやってきてここに住んじゃいま～すとかいう展開はさすがにないよな」
バレルに同意を求めてみると彼女はそうですねと呟いた。
「そんな一方的な物言いが通るのはそれこそあんまり役に立ちそうもない恋愛シュミレーションゲームだけですね～」
彼女の言うとおりだ。
「じゃ、夕食前にバレルに町を教えておくから……」
「ええ、気をつけていくのよ？」
両親が知っているのならよかったぁ……俺はそうおもいながらバレルと共に歩き出す。
「マスター、今夜の晩ご飯なんですか～？」
「さぁな？さっき聞いておけばよかったな……」
俺がそう呟いたときに俺の右斜め四十五度の方角から知り合いがやってきた。
「おや？雪人じゃないか？」
「誠か……珍しいな、街中で会うなんて？」
夕日を浴びてさまになった格好をしている友人兼幼馴染。
「雪人、人類はいつ滅亡するとおもう？」
そして、どこか頭のねじが一ダースほどかけているのか、それとも人よりも多くつけられすぎているのか、常套句のようにして俺に毎度尋ねてくる。まぁ、まともに答えたことなんてないけどな。
しかし、俺以外にそのことについて答える奴が一人いた。
「……それは人の手によって人類が滅びるのか、天変地異によって滅びるのか……どちらの場合を仮定してマスターに尋ねているのですか？」
「おっと？見ない顔だとはおもったけど……変わった子だね？」
確かにな、お前に対抗できる奴はもしかしたらこの程度おかしくないといけないのかもしれないな？

見てくる誠に俺は首をすくめると奴はとても面白そうに呟いた。
「驚いた、ここまで食いついてくるのは雪人に貸したゲームの先生ルート以来だ」
「って、お前も先生に手を出したんかい！」
「え？この人が幸人さんの持っていたゲームの持ち主ですか……成る程、深い」
「まぁ、もっと泥沼系もあるから今度貸してあげるよ……深いだろ？」
俺は不快だ。お前ら、何について激論をかわしているんだと俺は聞きたい。

第一章　第四話（前書き）

??「え～と、私が出てくるまで非常にまだ長い道のりですが、この??ちゃんをよろしくお願いしま～す！感想とか、特にメッセージなんかを期待していますので！」

第一章　第四話

四、

誠は手を振って去っていった。

「実にいい人材だ……雪人、彼女のようになると世界が楽しく見えるに違いないぞ」

たとえ世界が汚く歪んでいようとも、俺はこの天然になろうとは絶対に思いはしないだろう。

まぁ、俺たち二人は再び、街中を歩いていると……なにやら電柱から人が一人現れやがった。

「あ、あらゆゆゆ、雪人、偶然ね」

「マスター、この人誰ですか？何で、電柱から現れるんですか？ああ、そういえば宇宙人が人間を引き込みそうになっている映像を見たこと、私ありますよ？」

俺の目の前に現れた女の子……名前を東舞という。俺のことが嫌いなのか、毎度毎度奇抜な登場をしたり、けってきたり、暴力万歳なことを考えているであろう、危険度Ｓランクの怪物である。ちなみにだが、俺は一度たりともその暴力的な幼馴染のけりに当たったことはない。

「……いちいちおぼえなくていい名前だ。登場人物Ａ子さんで構わんぞ」

「何よそれ！あたしの名前は東舞よ！で、あんたにべっとり引っ付いているその子は誰？まさか、手を出したとか、そういう奴？えっちよね～男って」

ああいやだいやだと舞は呟いていたが、そんなの無視してバレルは相手の質問に答える。

「えっと、足なら出しましたよ？」

「足？」

当然のように疑問符を浮かべる舞。

ああ、成る程……ゴミ箱から足を出したということを言っているのだろう……そこまではわかったのだが、何故バレルがそのことを言い出したのか理解できなかった。
「ええ、足を出していたら雪人さんが私の足を掴んで、引っ張ってくれたんです」
「あ、足？へ、へぇ、雪人ってあ、足が好みなんだ？」
メモ帳になにやら書き込んでいるようなのだが、おいおい、それは何だ？変態リストの好みでも書き込んでいるのか？そして何だ、ミニスカートから太ももを伸ばしてみたりしているが、それは俺が本当に反応するかどうかの実験か？
「……よくわからんが、それは勘違いだぞ」
「え？そうなの？」
「……俺の周りにはこんな奴ばっかりなんだな」
ねじが取れすぎ、もしくはつけすぎ。可もなく不可もなくという言葉を俺のまわりは知らないのであろうか？
「でも、舞さんの足、綺麗ですよね、マスター？」
「ん？ああ、確かにな」
すらっとスカートから伸びている二本の足は洗練されており、とても綺麗である……重ねて言っておくが、俺は足にはあまり興味がない。
「そ、そう？」
舞はほめられたのがそんなに嬉しかったのか顔をちょっと赤めに染めると俺たちのほうを見てきた。
「じゃ、じゃあお二人さん……私はこれから用事があるから……」
そういって出てきた電柱の影に再び隠れる。面白がってバレルがついていくが……
「い、いませんよマスター！」
「……そうか、いちいち気にしてたら気が持たんからな……それより、そろそろ帰るか？」

結局、町案内とか言いながら変な連中二人に会って時間がつぶれちまったな……俺はため息を一つ出すとバレルと共に家に戻ったのだった。

――――

「「ただいま～」」

間の抜けた声がはもってしまったことについてはあれだ、ちょっと肉体的にも精神的にも疲れていたからだとおもいたい。

「……お帰り」

冷たい視線を俺へと向ける妹、なぜだ？

「え～と、あなたが雪人さんの妹さんですよね～？」

バレルが妹をひきつけてくれている間に俺は母さんにたずねることにした。

「春華、何で機嫌が悪いんだ？母さん？」

「ん～？ああ、あれはね～あんたよりも先にバレルちゃんに会いたかったんじゃないかしら？」

「そんな子どもな……」

あれか？誰もまだ踏んでいない雪道を自分が真っ先に蹴散らしたいとか、そういうくだらないことで怒っているのか？俺の妹は？

「まったく、ガキだな？」

「ガキって言わないでよ！兄さんとは一歳しか違わないのに！」

妹に背中をけられ、俺は見事に前に倒れた。

「ほら、ここで暴れない！暴れるんなら外で暴れなさい！」

「マスター、大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ……」

バレルに助けてもらって立ち上がっているあいだに春華はさっさと自室に戻ってってしまった。

「難しい年頃だな～」

「そうね、面倒よね～」

「面倒なんですか？難しいんですか？」

バレルがそう呟くが、まぁ、難しいな。何考えてるかわからない

し……父さんなんてこの前目があっただけで舌打ちされたって嘆いて家出しちまったからな。未だに帰ってこないし……相当傷ついたんだろうな。

――――――

「で、部屋なんだけど……雪人の隣ね？」

「わぁ～い！」

「……」

部屋割りは夕食時に決定。俺はその光景を黙って味噌汁を飲みながら見ていた。

「あら？春華は何か不満でもあるの？」

母さんの一言に妹は面白くなさそうに呟いた。

「別に……ただ、兄さんがバレルさんを襲わないか不安だったから……」

ぶふぉあ！

「あら、雪人……図星かしら？」

「ゲホ……いや、ただ、気道のほうにはいっただけ……」

「だから、バレルさんと私は同じ部屋のほうがいいと思うわ」

妹はそんなことを言い出した。

「けどねぇ、あんたの部屋、二人も寝るスペースはないわ」

「そ、そうだけど……」

「なら、春華と雪人で一部屋って言うのは？」

それを別にしても構わないのだが、春華は部屋をめちゃくちゃ汚くするのだ。だから、俺は小学六年生の時点で妹といわば別居状態になっている。

「そ、そんなことするわけないじゃない！」

何故か怒ってそんなことを言う妹。うん、こいつも自分の散らかし癖が迷惑をかけているということをやっと知ってくれるような年頃になったか？それにしてはまれに俺の部屋が勝手に荒らされてい

るようなのはなぜだ？
「ま、やっぱりバレルちゃん雪人の隣でいいわね？」
「ああ、俺はそれで構わないから……」
「ええ、私もそれでいいです」
結局のところ、はじめ言っていたことで収まった。
「やれやれ、何でいちいち春華は口出しするのかね？」
将来議員にでもなるつもりだろうか？これまで口げんかで勝った記憶がないのはしょうがないのだが、口が達者だとどうもいかんな。
俺はため息をついて次にのほほ～んと食事をしているバレルを見、そして最後にぶすっとした妹を眺めたのだった。

第一章　第五話（前書き）

？？「さて、この小説がどのくらいの人に読まれているかわかりませんが……構わず突き進みたいとおもいます！いえ～い！」

第一章　第五話

五、

「う～ん、いい朝だ～」

窓から日差しが差し込んできていてとてもいい気分だ。

「す～……すや……す～……すや」

寝ているとバレルも可愛いもんだな～……っと、今のうちにバレルの部屋に転がしておくか。

俺は誰にも見つからないようにバレルを抱きかかえると彼女の部屋に侵入してベッドの上に転がしておく。

「よし！完璧！」

「何が完璧なの、兄さん？」

黙って後ろを振り返るとそこには鬼が……いや、春華がいた。

「これから襲うの？それとも、襲った後の痕跡を失くそうとしてるの？母さんにいいつけてやる！！」

去っていった後ろ背中がなんだか殺気を纏っていたとおもったのは俺だけか？

「む～？なんだか殺伐とした空気ですね～お目覚め最悪です～……やっぱり、枕が違うと眠れないというのは本当なのですね～」

いや、それはそうかもしれないが、お前の目覚めを最悪にしていったのは俺の妹だろうな。すまん、バレル……

――――――

「で、雪人は襲ったの？」

「襲ってません、無実を訴えます」

朝食の席で俺の裁判が始まった。

犯罪者の汚名が欲しくなかった俺は弁護側の証言者としてバレルを出した。

「え～……っと、昨晩、目を瞑って寝ようとしたのですが……眠れなくてですね、その、一人で寝るのが怖いとかそういうのじゃ

なくて、マスターが一人で寝るのが怖かろうとおもってまだおきていたマスターに一緒に寝てあげますといってあげたんです」
いやいや、昨日はバレル……『怖いから一人で眠れないんです～一緒に寝てくださ～い』って言っていた癖してなんだ、それ？
「ふんふん、それで？」
「マスターは嬉しそうな顔をしてありがと～って言いながら……すいません、マスター、以後はまじめに話しますからそんなに睨みつけてこないで下さい。私が間違ってました」
間違っていたのは俺のほうだ。お前みたいな頼りない奴に弁護を頼んだのをよ。
「こほん、それで、怖くなった私はマスターの隣で寝させてもらうことにしたんです。マスターがとても不思議そうで、とても顔を真っ赤にしていたのを今でも思い出しますね～……それで、隣で寝かせてもらったんです……ああ、条件は朝には部屋に戻ることでしたけど、見事に寝過ごしちゃいました……以上、弁護側の証言を終わります」
これで、真実を理解していただけただろうか？俺はやっていない。
「……そうねぇ、それなら納得できるわ」
「……そんなありえるわけないじゃない！きっと、綿菓子かなんかで布団に連れ込んだのよ！」
言っていることはああ、成る程なとはおもうが、俺はそんなちゃちな真似はしない。笑わせてくれるぜ、俺の妹よ……そして、そこまで俺に犯罪者の烙印を押したいのか、春華。
「じゃ、判決は無罪ね」
「そんな簡単な……」
落胆した表情が隠せない春華……母さんは続ける。
「……あの顔を見なさい？」
「兄さんの顔？そんなの見たっていいことないわ」
そんなのってなんだよ？
「それじゃないわ、バレルちゃんの顔よ？」

母さん、それって何？俺の顔？
「とても無邪気な顔だし、瞳なんて澄んでて綺麗だわ……事実は素直に受け止める、そんな瞳をしているもの……今の春華の瞳はあの雪人より汚いわ」
あれ？何それ？俺の瞳ってそんなに汚いか？ためしにバレルに聞いてみた。
「……バレル、俺の瞳ってそんなに汚いか？」
「……悪魔が棲んでますね」
それは冗談だとおもっておこう。
「……はぁ、ったく……とりあえず、俺、学校行ってくるよ」
「あ、そうだったわね……いってらっしゃい……バレルちゃんも行くわよね？」
「ええ、転校届けとか出してますから」
いつの間に……そんなことをしたのだろうかと俺はおもったのだが、気がつけば彼女は俺と同じ高校の女子制服を着ていた。青を基調として黄色のラインが目を引くもので……男子は普通の学ランである。
さて、制服のことはここまでにしておいて、俺は立ち上がり鞄を掴むが……
「まって、私がバレルさんを学校に連れてくわ……色々と話しておきたいこともあるし……それに、仲良くなりたいからね」
「バレル、それで構わないか？」
「構いませんよ？私もマスターの妹さんとは仲良くなりたいですから……ええと、春華さんでしたっけ？よろしくお願いしますね♪」
そういったので俺は先に一人で学校に向かうことにしたのだった。
しかし、このことによって俺は見事にわき道へと逸れてしまって行ったに違いない。彼女たち二人が後から来ることを知っている立場でいながら、俺はいつものように先に行ってしまったのだ。別に彼女たちに危害があったわけではないのだが……
――――

夏の暑さにひぃひぃいいながら俺は学校へ向かって歩いている。少しだけ時間帯が早いためか俺みたいに暑そうな面をして学校へ向かう奴らは少ない。
「せんぱ～い！」
「うぉっ！！」
いきなり右腕を前に引っ張られたような感じがして、腕を掴んだ相手を見る。
「……なんだ、里香ちゃんか」
ショートカットの女の子……本名、石井里香……あの誠の妹とは思えないほどの素直でよい子なのである。ただ、問題点としては周りの状況など関係ないように振舞うところがあり、空気が読めないといわれたりすることが多々ある。
「なんだとはなんですか！このさわやかな朝に！」
小麦色の肌を惜しげもなくさらしながら彼女はあはははは……と笑っている。
「ふぅ、里香……ちょっとはお兄ちゃんのことを考えてくれよ」
「誠、つらそうだな？」
そして、後ろから来たのは今にも倒れそうな顔をした誠だった。誠の嫌いな季節は夏で、暑いのがとりあえず駄目だった。
「そろそろ溶けて消えてしまいそうだ……」
「お兄ちゃん元気なさすぎ～」
ニコニコ笑いながら彼女は俺の手を掴んだままで歩き出す。発展途上な胸があたったりしてくるが朝から何考えているんだと自分を叱責する。
自分の中のピンク色の霧を追い払うために俺は話題をふることにした。
「しっかしまぁ、俺もお兄ちゃんって呼んでもらいたいものだな～」
誠に振り返って俺はそんなことを言ってみた。奴はさも面白くなさそうな顔をすると呟く。
「……そうかい？僕としては兄さんって呼んでもらったほうが

いいんだけどな？」
　首をかしげている誠にはわからんのだろうな……いや、普段からそう呼ばれている連中はわからんのだろう。それか、兄さん……その響きに他人が混ざっている気がするのはうちの妹だけなのかもしれないな。
「頼んでみたらどうだい？彼女なら承諾してくれそうだけど？」
「おいおい、あんな現実主義者に説得を試みたところでやられるだけだろ」
「そうかな？君の言うことなら何でも聞きそうなんだけど？それこそ、お風呂とか」
　何故、俺が一緒にお風呂に入らなくてはいけないのかさっぱり理解できなかった。そんなこと呟いて歩いていると、俺は違和感を覚えて足の裏を見たのだった。
「ん？」

第一章　第六話（前書き）

??「さて、今回の話からようやくそれっぽいことになっていくことでしょう！そして！今回も新キャラが登場！ちなみに、私ではありません！残念！」

第一章　第六話

六、

見ると、そこにはカタツムリが……死んでいた。

「センパイ！カタツムリが死んじゃいましたよ！」

「あ～……」

「ふむ、カタツムリか……最近はぜんぜん見なかったけど……小さい頃は良く見たなぁ～」

里香ちゃんに怒られてしまった……それと、誠に言われて思い出したのだが俺も小さい頃はよくカタツムリを見たものだったな。

「まぁ、今でもよく見るけどね～」

「どっちなんだよ……」

「それは里香のウィンクさ」

片瞑りね……しょ～もないな。

「……とりあえず、里香ちゃん……俺、このカタツムリの墓を作って学校行くからさ、先に二人でいっていてくれないか？」

「センパイ！私も手伝いますよ！」

「いや、いい……遅刻したら里香ちゃんの皆勤に傷をつけてしまうからな」

「わかった、まぁ、終わったらすぐに追いついてきてくれよ？」

俺は頷き、二人の背を早く追いかけるためにアスファルトから離れて土のところへ持っていく。

「……少年、少年……」

「！？」

カタツムリがしゃべった！と、おもったのはなぜだろうか？

「……見事、私を打ち破った……」

「は？」

そして、さらに驚いたことが起こった……

「師匠！し、ししょ～う！！大丈夫ですか！」

ブロック塀を粉々にしてなんと、ぼさぼさの髪を後ろで縛った女の子が現れたのだった。少々その足が浮いているのはなぜだろうか？
「おお……我が愛弟子……シェル……お主が天使になった姿を人目でも……」
「！？」
天使？天使だって？
「しょ、少年！」
「え？あ、はい！」
何故か敬語になってしまったのだが、そのことはどうでもいい。
「この子を……この子を天使にしてやってくれ！」
「え？」
「頼む！私を見事に打ち破った貴殿の実力を信じてのことなのだ！」
俺がしたことといえば、カタツムリを踏んづけてしまったことぐらいなのだが？
「しかも、倒した相手の墓を作ろうとするような器の大きさ……私の愛弟子をおぬしに託したいのだ！」
俺は困惑するばかり……隣の少女はさっきから師匠！師匠と連呼している。近所迷惑もいいところだろう。
「は、はぁ？ええと、残念ながら俺は……」
「そうか！やはり……実力で愛弟子を倒して私から奪って見せたいというのだな？」
「だ、誰もそんなことは……」
「いいのだ！この私の最後の華として……主らの戦いを見届けたいとおもう……」
「はいっ！師匠……このシェルに任せてください！いざ参らん！」
なにやら拳法のような型を取る相手……シェル。
「あの～……」
俺、そういうことできないとおもうんですが？と、相手に伝えようとしたのだが瀕死のカタツムリは何も聞き入れてくれなかった。

「それでは！試合開始！」
マジか？気がつけば見世物とでも勘違いしたのか学生さんたちやおばちゃんたちが俺たちの周りを囲んでいた。何だ、このストリートファイトは？警官もものめずらしそうに見ているのだが止めなくていいのだろうか？
「はぁぁぁぁぁ！せやっ！！」
「のわっち！！」
恐ろしい勢いの拳が気がつけば迫っており、それをぎりぎりで避けた……のだが、そのまま相手の拳から衝撃波が発生！？衝撃波はコンクリートの壁を打ち砕いて消滅した。え？じゃ、今の食らってたら俺が消滅してたとか？
「い、いやじゃぁぁぁぁぁ！！！」
「てりゃっ！はぁぁぁっ！！」
また、ためが来た！こんなの食らったらお陀仏であるから俺は学校へ向かおうとして……走り出そうとするが、ギャラリーがいるので逃亡は出来ないようだった。
「どうした！このシェルの攻撃に成す術を失ったか！」
「……」
どう考えてもこれは一方的な攻撃だろうに……失うどころか初めから術をもっていないのだ。
「せやっ！！！」
「うおっ！」
衝撃波が何のエフェクトか知らないが突風をまとって俺のすぐ近くを通り過ぎる。
「次は当てるぞ？確実に！」
「くっそ……」
殺気のようなものを相手が発する。俺は頭が回らない、体が動いてくれない……すると、自然と動きが緩慢となる。
「だぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！せりゃっ！！」
「……あ」

俺は本能的か、目の前で腕をクロスさせる……俺もコンクリートが衝撃波を食らったように消滅してしまうかとおもったのだが腕に切り傷が出来たぐらいで大丈夫だった。
「え？」
「なんと！？防いで見せたというのか？……ならば、次は最大限の力を振り絞って……だぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
大気が震え、地鳴りが始まる……なんだなんだと周りの人たちがさらにシェルのほうへ視線を移す。
「く……」
さて、どうする？俺の頭は動くようになった、体も何故かきちんと動いてくれている……そして、俺は相手の弱点に気がついた。
「……思えば、溜めてる間は無防備だな？」
そうと決まれば俺は相手との距離を急いで縮める。相手が溜め始めたときからそうしておけば殴り合いまでにはもっていくことが出来るはずだったのだ……今までそれに気づいていなかった俺って馬鹿だな。
「うぉぉぉぉぉぉぉ！！！」
走り出し、相手に飛び掛る……
「く……何！？」
強襲が成功したようで、相手はそのまま俺と一緒に地に倒れる。
「そこまでっ！！！」
「はぁ……はぁ……」
相手のマウントを取って興奮のあまり……こほん、疲労のせいで呼吸が荒くなっていた。
「……し、シェルが負けただと？」
相手は愕然としており、俺は馬乗り状態を続いているのもあれだったので立ち上がった。
「……どうだ、シェル？この少年なかなか強いとはおもわないか？」

「……そのようです」
白い服を着たシェルと呼ばれた人物は死にそうなカタツムリにひざまづく。
「……お前と過ごした一週間……楽しかったぞ……少年、我が愛弟子を頼んだぞ？」
「し、師匠～！！！」
カタツムリはこうして、弟子に息を引き取られながら死んでしまったのだった……その後、俺はシェルと共にカタツムリの墓を立てて手を合わせたのだった……

第一章　第七話（前書き）

？？「題名もきちんと本編に登場してよかったよかった……私の名前が出てこないのはおかしい！」バレル「いえいえ、おかしいのはあなたの頭ですよ～」？？「言ったわね～！というより、何であんたが前書きに来てるのよ！」バレル「勿論、皆様に評価感想をお願いしにきたんですよ！皆様、よろしくお願いします！」

第一章　第七話

七、

カタツムリの愛弟子だった天使候補生であるシェル・バレット……彼女が一週間のうちに人間界で学んだこととは忠義心と身を守る術だったそうだ。

そして、その話を聞いた俺はおもった……カタツムリ、あなたの存在が俺の人生を変えてしまいましたと……

「……いい人だったんだな？」

「ええ、いい人でした……これからよろしくお願いします……えーと、名前は？」

「生野雪人だ。呼び方は……」

何でもいいといおうとすると遠くからよく知った声が聞こえてくる。

「あ、マスタ～！」

「ん？」

「バレル？」

「兄さん？って何この惨状？」

春華もやってきており、壊れたコンクリートの壁なんかを見つめている。

「あれ？シェル？」

「やはり、バレルか……久しいな？シェルは元気だったぞ？」

一人称が『シェル』とぽけーっとしたこの二人は知り合いだったようだ。

「……なぁ、二人は知り合いなのか？」

「ええ、まぁ……知り合いというよりは姉妹ですね。一歳年上の私のお姉ちゃんです……あ、ちなみにまだ上がいますから」

似てないな、やっぱりおねえちゃんだからかシェルのほうが頼りになりそうな感じなのだが？いや、姉がしっかりしたから妹がぽや

ぽやになってしまったのだろうか？
「それより、バレル……師匠とは知り合いなのか？」
「師匠？師匠ってマスター……いや、雪人様のことですか？」
バレルがそんなことを言うとシェルは頷く。
「ええ、私のマスターですけど？」
「む？やはりか……まぁ、しょうがないな……師匠、学校に行く途中ではなかったのですか？早く参りましょう」
「え？ああ？」
もう話は終わったといわんばかりにシェルは俺の手をとると歩き出した。
「え？し、師匠ってどういうことですか！マスター！」
バレルがなにやらあせった風にそんなことを言い始める。
「え～と、それはだな……」
信じてくれるかわからないが……さて、カタツムリがしゃべるのと目の前に天使候補生が現れるの、現実的に考えたらどちらが確率的に大きいだろうか？俺はどっちもどっちだとおもっているのが皆はどうだろうか？
「……マスター、カタツムリはしゃべりませんよ？だって、そんなのおかしいです！」
バレルが俺にそんなことを言う。自分の存在も充分おかしいくせしてな。
「そうねぇ、兄さん……カタツムリはしゃべらないとおもう」
「やっぱ、そうなるよな……」
だが、俺はこの目で、耳で確認したのだ……
「師匠、この二人に言っても信じてもらえないとおもいます」
「え？」
「こほん……とりあえず学校へと向かいましょう」
「あ、ちょっとシェル！私がマスターと一緒に学校に……」
「師匠、失礼します」
シェルは俺の手を掴むと、あっという間に二人の前から姿を消し

たのだった。
――――――
「ふぅ、ここならばあの二人も追ってこれないでしょう」
「……まぁ、確かにそうだが……もうちょっと場所を考えてもらいたかったな」
そこは男子トイレの個室だった。おいおいおい、こんなところを警察に見つかったらタダじゃおかないんだぞ～？
「バレルからこの光翼閃輪偽天争……天使昇格試験についてどういったことを聞きましたか？」
俺は昨日の知識を引っ張ってくる。
「え～と、その期間中ずっとここ……人間界にいればいいんだろ？悪魔とかそういうのからも逃げるとかそういうことしないといけないとか……」
ええ、その通りですとシェルは呟く。
「では、師匠……先ほどシェルが呟いた光翼閃輪偽天争の意味を教えたいとおもいます。どうせ、バレルからは聞いてはいないのでしょう？」
頷くとため息をつくシェル。
「こほん、シェルの妹が師匠に詳しく話していないというのは由々しき事態ですね、まぁ、バレルの場合はきっと知らないのでしょうが……ですが、すみません」
「いや、謝らなくていいって……そもそも、あわないはずだったんだし……」
「ええ、そうですね……さて、光翼閃輪偽天争についてこの、昇格試験の本当の意味……それは、偽の天使を探すことです」
「偽の天使？」
俺はそんなことを知らず知らずの内に呟き、首をかしげる。
「どういう意味だ、それ？」
「偽の天使とは……実は、この光翼閃輪偽天争の中に一人だけジョーカーと呼ばれる者が混じっているのです」

彼女が口にしたことを俺はまったく理解できなかった。
「ジョーカー？」
「引いてしまうとアウト！ということです……ジョーカーがいない年のほうが多いのですが、今回はどうやら見事に当たってしまったようなのです。すさまじいほどの戦闘能力を持ち、あったが最後……やられてしまうでしょうね。噂ではS級の悪魔とかはたまた魔王だとか言われていますね」
「う～ん、例えるならゲームのラスボスみたいなものか？」
「いえ、ゲームのラスボスならばダンジョンの奥でおとなしくしているでしょうがジョーカーはどこに出るかわかりません。スライムとか、そういうのにラスボスが混じっている感じですね」
それは怖い。しかも、シェルがつっこむところがそこかと俺はおもいたい。何？やっぱりバレルの姉もゲームが好きなのか？
「ちなみにジョーカーの姿は不明です」
「自由に姿を変えることが出来るってことか？」
「いいえ、一度も見たことがない存在……というより、会ったものが全員行方不明になっているのでわからないといったところでしょうか？見事にジョーカーに当たった天使候補生たちは徒党を組んだそうなのですが、ある年は全員が行方不明になったと聞きます」
「……」
天使候補生、全員が行方不明？それってどのくらい相手が強いのだろうか？まぁ、俺にはあまり関係のない話かもしれないが……
「そして、もう一つ……シェルは危惧していることがあります」
「え～と、何だ？」
「これもまた噂なのですが……今回はジョーカーがもう一体、存在していると聞きます
」
「マジで？」
「ええ、ジョーカーがどういったものか私にはさっぱりわからないので実感がわきませんが……シェルと一緒にいる師匠にも危害を

加えるかもしれません……それでも、シェルを傍に置いてくれるでしょうか？」
　そんなシリアスな展開へとバレルはもっていかなかったな……そんなことを考えていて、俺はため息をつくしか出来なかった。
「既にバレルがいるからな……いまさら一人増えたところで構わないとおもうし、二人いればなんとかなるんじゃないのか？」
　そういうとシェルはありがとうございますと頭を深々と下げた。
「……ジョーカーが現れたら天使になれなくても、師匠を護りたいとおもいます」
「……まぁ、もしかしたらあわないかもしれないからさ……とりあえず、学校へ生かせてくれ、俺を」
　遠くから始業のチャイムが鳴り響いてきたのを俺は確認するとため息をついた。

第一章　第八話（前書き）

バレル「しかしまぁ、私ってすごいですよね～」？？「あんた、まだいたの？いい加減、引っ込んで欲しいんだけど……」バレル「マスターの言うことなんて全部きいてますから！」？？「そうかいそうかい……ええっと、これ以上行数を無駄にしたくないので一言、これからもよろしくお願いします」

第一章　第八話

八、

シェルが隣のクラスで、俺は自分のクラスへと遅刻してやってくる。どうやら休み時間だったようで俺と同じクラスになったバレルは既に皆に囲まれていた。そこで俺は気がついたのだが、シェルはバレルより一歳年上ならば三年生ではないのだろうか？

「あ、マスター！」

「マスター？」

俺のほうを見てそんなことを言うが、俺はあわてない。既に口裏は合わせている。

「えーと、バレルさん、マスターってどういうこと？」

「それはですね～……えっと、私が昔通っていた喫茶店の主人がマスターと呼ばれていてその人に非常に似ているからなのです！」

よく言った、バレル……俺は黙って席に座って次の授業の準備を始める。

「へぇ、その人ってあんなに気難しそうな顔してたんだ？」

「気難しい？マスターがですか？私はそうとはおもわないんですけど……意外とああ見えて優しいですし……ゴミ箱から引っこ抜いてくれたのもマスター……むぐっ！！」

「みんな、次の授業はなんだ？」

余計なことをバレルが口走る前にさっさと止める。

「え？次は数学だろ？お前、机の上に出してるじゃないか？」

「ああ、ただ確認したかっただけなんだ……バレル、ちょっと来てくれ……」

俺はバレルを引っ張って屋上へと向かったのだった。勿論、クラスメートの連中もついてこようとしていたのだが見事にそれをまいたのは言うまでもない。

――――――

屋上へと引っ張ってきた……というより、掴んでもってきた天使候補生、バレル・バレットは何故かニコニコとしていた。
「ご機嫌だな？どうかしたのか？」
「いやぁ、だって、屋上に二人きりって言ったら決まってるじゃないですか……恋愛ものの基本ですよ？」
「……残念ながら俺は屋上で別れ話をしたという話を知らないってわけじゃないぞ？」
「！？」
さて、冗談はそのくらいにして……
「バレル、光翼閃輪偽天争って知っているか？」
「いえ？知りませんけど？」
不思議そうにこちらを見てくるということは嘘をついていないということなのだろう……いや、天使が嘘をつくのもどうかとおもうがな。
「じゃ、ジョーカーは知ってるか？」
「ジョーカー？これですか？」
バレルが取り出したのはトランプのジョーカーだった。
「ぜんぜん違う！はぁ……バレルに期待していた俺が悪いのか？」
もっと別のことについて知ることが出来ると思っていたのだがどうやらお門違いだったようだ。
「え～と、何かを期待してくれていたんですか？」
「まぁ、な……」
「そう、ですか……すみません、お役に立てなくて……」
いやな空気が流れ出し、たまらなくなってその場に座り込むと、俺はちょっと考え事をした。何もこんな風に攻める口調で言いたいわけではないのだが……知っていることを武器にすることが出来るのは事実だろう。そうすればちょっとぐらいは俺だってバレルを手伝うことだって出来るのだ。
「……」

「……あ、あのマスター」
「何だ？」
いやな空気を吹き飛ばすようにバレルは口を開く。
「実は、さっきからこちらに何かが向かっている気がするんです」
「え？」
俺は立ち上がって屋上の扉を見る……と、一人の男子生徒とおもわれる人物がやってきた。
「二年四組生野雪人……くまさん柄のトランクス」
「はぁ？」
「二年四組バレル・バレット……白のパンツ」
「え？」
目の前に現れた男子生徒の目は赤かった……そして、腹の部分に巨大な目がある。
「こいつ……何だ？」
もしかして、これがジョーカーか？こんな変態が……人のパンツの柄を言い当てたりする奴……がジョーカーなんて洒落にもならんぞ？
「さ、さぁ？多分……多分、この人は女神様が雇った悪魔ではないのでしょうか？いかにも下級っぽい感じがします」
確かに、人のパンツを見ることができるなんて役に立ちそうな感じはしないし、いかにも小物っぽい顔をしている。
「まぁ、人を見た目で判断するのはどうかとおもうが……」
「あれは悪魔ですけどね？でも、どうしたらいいんでしょうか……」
困ったことに相手はこちらへと徐々に近づいてくる。その手にはパンツが握られており、時折……つめてやる～つめてやる～口につめてやる～……となにやら奇妙なことをいいながら近づいてくる。
「……何か武器とか持っていないのか？」
俺は隣の天使候補生へと視線を移す。

「ぶ、武器ですか？」
「光で浄化するステッキとか聖なる剣とか……」
「あ！そういえば支給されたものがありました！」
制服の中に手を突っ込むと何かを引っ張り出す。
「光の矢です！」
「おおっ！まともなものが出てきたな……早く弓でやっつけろよ！」
待っててくださいね～とかいいながら再び制服の中に手を突っ込むが、今度はなかなか手を出すことはなかった。
「……忘れちゃいました！こうなったら肉弾戦です！」
「……結局、こうなるのか……」
雄たけびを上げながらつっこんでいくバレルの後ろで俺はそう呟きながらも加勢するためにその後を追いかけ始めたのであった。
バレルの拳が相手に触れるよりも先に相手はいきなり崩れ落ちる。
「師匠！大丈夫ですか！」
「シェル！」
シェルが右足を思い切り上げており、既に制服姿で若干短めのスカートなのでパンツが丸見えなのだが……そこはどうでもいいことだ。
「こほん、まず右足を下げてくれ」
「あ、しつれいしました……こほん、下級中の下級悪魔が出てきて幸いでしたね」
悪魔と呼ばれた男子高校生というより、もう何なのかわからない物体は影となって消えていった。
「それより、バレル……主というものを護るって言うのが今回のこの天使昇格試験の一つではなかったのか？」
「え、えーっと、そうでしたっけ？」
あせった調子でそんなことを言うバレル。その目が泳いでいるということはちょっと怪しい、こいつ……もしかして嘘をつこうとしているとか？態度がバレバレなのだが……

「お怪我はありませんか、師匠？」
「あ、ああ……それより、今みたいなのがうじゃうじゃいるのか？」
両方にたずねたつもりなのだがバレルは俺から視線をそらした。
「……いえ、うじゃうじゃというわけではありません……基本的に主とその候補生が二人になったときとかに出てきたりします。もっとも、下級悪魔たちは早く魔界に帰りたいために大体順番を決めて襲ってきますけどね」
まぁ、シェルがいるから大丈夫ですと彼女は呟くとバレルをちらりとみる。見られたバレルは俺の前から走って去っていったのだった。

第一章　第九話（前書き）

??「さて、そろそろ折り返し地点に差し迫ってきている感じですが、まだまだです！実況らしい実況はしてませんが私を応援してください！」

第一章　第九話

九、

「シェル、私……もう、もうこんなのいやですから今度こそは絶対に主を守りぬきたいんです」

「……でも、シェルが思うに主人の傍で戦うってことは主人にも危険が及ぶとおもうが？」

「だから、遠距離から攻撃できる方法を見つけたんです！」

「魔法？」

「いえ、私は皆みたいにそっちの素質はありませんから……」

「じゃ、銃？」

「いえ、手入れが面倒です……弓がいいです。光の矢ならたくさん作れますから」

「そう、それならバレルの主がいい人ならいいな」

「ええ、そうですね！」

それはちょっと前の姉妹の会話である。

――――

あれからバレルの様子がおかしい。

「……」

俺の様子をちらりと見ては俺から視線をそらす。何度となくそういう行動をしてきたのかわからないが、放課後になるまでそんな調子で授業も何故かぼーっとしていた。いや、普段からぼーっとはしているが、それとはちょっとちがった感じだな。

放課後、俺のところへシェルがやってくる。

「さ、帰りましょう師匠」

「え？ああ……帰るぞ、バレル？」

「え、あ、は、はいっ！」

バレルもあわてて鞄を引っつかむと俺のところへやってきて……

……昨日とかだったら引っ付いたりしてくるのだが今日は引っ付い

てこなかった。ん？まだ一日二日ってところだから昨日はたまたまだったのか？

――――

結局、シェルは俺の家に住むことになり、部屋は無論、バレルの部屋である。

夕食時にそんなやり取りをしたのだがバレルは静かで悲しそうなままだった。

「……兄さん、何かあったの？」

「いや、別に……」

言ったって信じてくれないだろうから俺は話さずに首をすくめておいた。

「え～と、シェルさんだっけ？妹さんと何かあったの？」

今度はシェルに尋ねる。しかし、シェルはさぁ？と呟くとそれっきりだった。

「……兄さん、シェルさんってクールな人なのね？」

ニコニコしながら春華は俺にそんなことを言ってくる。

「そうか？そして、何でお前はそんな顔しているんだ？」

「だって、かっこいいじゃない？」

ああいうのが好みなのか？いや、シェルって女の子だよな？う～む、俺にはよくわからんな。男だし……

――――

深夜、俺はどうかともおもったのだがノックをしてバレルたちの部屋に入ったのだった。

「なぁ、バレル……どうかしたのか？おかしくなってるぞ、お前」

元からおかしいが、そういう次元のおかしいではない。まったくしゃべらないわけではないのだがどこかよそよそしい態度なのだ。

「べ、別に……何でも……ありません」

「教えてくれよ、俺はお前の主なんだろ？」

そういうと彼女は俺のほうをゆっくりと見た……ベッドでは疲れたのかシェルが健やかな寝息を立てながら妹に負けている胸を

上下に動かしながら眠っている。
「……」
「……」
俺はだんまりを決め込んだバレルに話しかけることなく、黙っていた。
「……天界にいたころなんですが、見たこともない神様に私、仕えていたんです……ある日、ちょっと争いごとが起こってですね……多分、死んじゃったんです。私、まだ役に立たなかったから姉さんたちと違って安全な場所にいて、そのことを聞いて……ずっと、主の傍にいたいって思っていたんですよ」
彼女の話には悲痛なところが感じられる。
「……それで、天使になるためこの期間中、できる限り主の傍にいたいっておもったんです。会えなくなるだろうからシェルとも最後に会話をして、彼女に私、絶対に主の近くにいるって誓ったんですよ」
「成る程な……」
シェルはそのことをあのちらっと見たときに思い出させたのだろう。
「マスター、ちょっと私……頭を冷やしてきます」
バレルは部屋を抜け出し、出て行ってしまった。
「……師匠、あの子は弱いですよ」
「シェル、おきてたのか？」
俺はシェルのほうを見るが、彼女は未だに目を瞑っている。
「寝言です、勝手に聞き流していてくれて構いません……拳術なんてわからないくせしてとりあえず、師匠を守るためにつっこんでいったのでしょうね。まぁ、あのように突進していってもやられるだけでしょうから……やったことは犬死に等しいです。あの場合は師匠の手を引いてあの場所から逃げるのが一番でしょうね」
とても辛口コメントを俺に伝えるシェル。
「でも、俺だってあの程度なら戦えるとおもったんだが？」

「ええ、悪魔とはいえ、人間でも倒せないわけではありません……ですが、主が傷ついてしまったり、倒されてしまったら天使になることはほぼ、不可能です」
「ほぼ？じゃ、カタツムリを倒された時点でシェルはアウトじゃないのか？」
「いえ、今では前師匠が今の師匠……つまり、生野雪人様に権利を譲渡してしまったのでシェルは大丈夫なのです」
「成る程な……」
「主が別の誰かにその権利を譲渡してしまえばそこまでなのですが、相手が拒絶した場合は終わってしまいます」
そこのところはうまく出来ているんだなぁ～
「……あの子は今頃どこかで泣いているでしょうね……きっと、屋根の上なんかにいるかもしれません」
そういって本当に眠りに落ちたのだろう……今度はいびきをかき始めた。
「……怪我もしてないのに勝手にあいつはおびえてるのか？」
俺は屋根へと向かったのだった。

――――――

「師匠……」
「どうした、考え事か？」
涙を拭くのを俺に見られないようにしているのか隠すようにしているバレル……まったく、苦労性な奴だな、こいつは……
「バレル、俺は一つおもうんだ」
「え～と、何をですか？」
「失敗するのは当然だって……だからって失敗していいとは言ってないからな？」
「……」
俺はさらに一人で続ける。もう、何を言っているのかもわからなくなってきた……。
「次、何か失敗したらおしおきだからな？」

「え？」
「健康状態の俺のおしおきはきついぜ？ちゃんとしとけよ？」
「わ、わかりました！」
バレルは立ち上がって頷く。
「さ、今日はもう遅いから早くシェルの隣で寝ろよ」
俺はそういったのだが、バレルは俺を見る。
「……あの、マスターの隣で寝ていいですか？その、シェルのいびきうるさいので……」
「……ああ、好きにしろ」
可愛い嘘だとおもったのだが……後に俺はそれが嘘ではないと知ったのだった。

第一章　第十話（前書き）

??「夢の二桁！って意外と小さい夢でしたかね？ま、まぁ……地道にがんばっていくことが大きいことを成し遂げるということで……記念すべき？第十話、どうぞ」

第一章　第十話

十、

気がつけばバレルが俺の家にやってきて数週間が過ぎていた。明日から夏休みで今日は終業式……俺とバレルは既に終わった終業式についての感想を話し合っていた。

「校長先生ってどこも話が長いんですね～」

「何だ？前にも学校に行っていたのか？」

「う～ん、まぁ、そんなものですね……校長先生、同じことを延々と繰り返していましたから」

う～む、校長先生としてはいいことを連発したいのだろうが、一度聞けば大体わかるんだが……

「それより、あれからずっと下級悪魔とかこないな？」

微妙に距離を置かれたあのころから結構時間が経ったのだが俺とバレル、そしてシェルの前には一体たりとて悪魔が姿を現すことはなかった。

「風邪にでもなったのでしょうかね？ええと、期間が長いですからインフレエンザですかね？」

「なんだ、そのインフレエンザって？」

政治と会社関係にありそうな言葉だな？どういう症状が出るのだろうか？

「でも、戦わなくてよかったですよ～？マスターが怪我しませんから」

「……まぁ、そうだな」

俺だって怪我するのはいやなので来てくれないのは嬉しいものだ。

「師匠、バレル……お待たせしました」

俺たち二人が待っていた相手がやってくる。

「じゃ、帰りますか……」

普通は部活をやっている時間帯なのだが俺たち三人は所用で入っ

ていなかった。
帰ろうとする俺たちの前に誠が姿を現す。
「や、お帰りかい？」
「ああ、そうだが？」
そう答えると奴はにこっと……その瞬間、俺は背筋に悪寒がした……笑った。
「そうかい、たまには犬の散歩をしてあげるといいと思うね」
「……わかった……それより、笑っているけどなんかいいことがあったのか？」
奴がにこっと笑うときは厄介ごとが始まる前だ。他人の不幸を平気で笑い飛ばす奴だからな……そういえば、奴があせったところなんて一度も見たことがないな。
「ああ、そうだよ？実に面白い人を見つけてね」
「？」
さわやかな笑みを浮かべながら俺たちにさよならを告げると奴はいなくなったのだった。
「……石井さん、なんだかとても機嫌が良かったようですね、師匠？」
「ああ、なんか怖かったな……」
「そうですか？さわやかな笑顔でしたけど？」
バレル、お前は素直でいい子だな……いつか、絶対に騙されるに違いないけど。
「とりあえず、奴が言ったことをしたほうがいいだろうな～……」
「犬さんのお散歩ですか？」
俺の家には犬が一匹おり、青い屋根の犬小屋に住んでいる。名前は『オイデ』である。この変な名前にもれっきとしたエピソードがあり、名前が決められていない間においで！おいで！と連呼していたところあの犬は
「オイデ、おいで！」
と聞き取ってしまったらしい。その結果として名前がオイデとなっ

たのである。

――――――

「じゃ、二人とも散歩に行ってくるからな？」

「ええ、気をつけて行ってきてください」

「マスター、信号に気をつけて下さいね～」

俺は二人に手を振ってオイデの散歩を開始する。悪魔が襲ってくるのは主と候補生がいるときだけなので俺一人でいても大丈夫だそうだ。

オイデは雑種の犬で、俺が拾ってきた犬でもある。可愛いというより不細工で普段は犬小屋から一歩も出ようとしないという引きこもりなのだが、名前を呼べばどこにでもやってくるというかっこいい？犬なのである。ちなみに犬小屋の名前欄には『花子』とかかれていたりもするがこの犬にはオイデしか通用しない。

「オイデ、何か食べたいものでもあるか？」

「……」

首を振る……と、俺の後ろを見る。

「何だ？かわいいメス犬でもいたか？」

振り返るが、そこには何もいない。

「あら、ゆゆゆゆ……雪人じゃない？」

「お、舞か……」

歩き出そうとすると右斜めから今度は話しかけられた。

「い、犬の散歩？」

俺に対して何か苦手意識でもあるのかこいつはよくかむ。

「ああ、お前は？」

「あ、あたしも散歩……奇遇ね？」

「まぁ、お隣同士だからな～……別に奇遇ってわけじゃないだろ？」

「む、何よ！奇遇って言うのよ！」

「はいはい、奇遇だな～」

すぐに怒るのは相変わらずで俺は首をすくめたのだった。

「ほら、オイデちゃんも呆れた顔をしているわ」
「……元からこんな顔だぞ？」
人を小ばかにしたような面をしているのがうちのオイデの特徴である。
「きっと心の中じゃ雪人のことを馬鹿にしているに違いないわ」
「そうかい、じゃ、俺はまだ散歩の途中だから……」
ゆびぱっちんをするとうちのオイデはいきなり走り出すという一種の特技？を所有している。これは面倒な友人と会ったときに脱出方法として発見したものである。
「よしよし、やっぱりオイデは賢い奴だな……後でなんかかってやるから」
小さくなっていく舞に手を振って俺はその場を後にしたのだった。

――――

「……」
なぜだろう、誰かに見られている気がする……そうおもい始めたのは誰もいない公園……平日にしても珍しい、この時間帯ならおばちゃんたちがくだらない話をしているはずなのに……いるときだった。
「う～……わんっ！！」
めったに吼えないオイデが吼える。
「ん？どうしたっていうんだ？」
オイデが吼えた方向に視線を送ると……そこには右腕が異様に発達している人型の何かがいた。
「……」
「悪魔……」
「え？」
俺の隣には気がつけばロングヘアーの女の子が立っており、彼女は静かな目で一言悪魔と呟いた。
「……排除」
彼女は懐から拳銃を取り出すとそれを相手に一発、撃ち込んだ…

……そんなものが効くのか？と疑問におもったのだがどうやら心配後無用だったようで見事に相手は消滅した。
「……完了」
「え～と、君は？」
「自分？自分は……スプレ・ロング」
主はオイデ……と呟くとオイデの頭を撫で始めた。は？オイデが主だと？
――――――
「……主の言葉が理解できない」
「そりゃそうだろうな」
いつかのカタツムリは見事にしゃべっていたがうちの犬がしゃべったところなど一度も見たことがない。しゃべらせようと小さい頃がんばってみたがこいつがしゃべれる言葉はう～とかわんとかがるる……ぐらいだろうか？お手も出来ないような犬だ。

第一章　第十一話（前書き）

??「あ～もうなんだかこの??って名前が定着しちゃった気分だな～。あー、こほん、知りたいと言う人がいたら教えてあげ・・・・・え?駄目だって?」

第一章　第十一話

十一、

「犬語はさすがに天使でもわからんだろうな？」

「……天使候補生」

「そうだったか？」

俺としてはどっちももう一緒なのだが……

「それより、助けてくれてありがとうな？」

「……主を護るのは当然」

「でも、助けてくれたのは事実だ……オイデの飼い主は俺だし」

「……」

昏いイメージのする相手だ……顔は可愛いのにな。

そんな話をしていると声が聞こえてくる。

「マスター！」

「師匠！大丈夫ですか！」

戦闘態勢……光の弓を装備したバレルに拳に指ぬき手袋を装着したシェル。

「ええと、悪魔はもういなくなったんですか？」

「師匠が倒したんですか？相当強い奴が来たとおもったんですけど……」

二人とも未だに臨戦態勢のままであたりを見渡すが当然のように悪魔の姿はない。

「いや、俺が倒したんじゃなくてこっちのスプレさんが倒してくれた」

「……スプレで結構、主」

「す、スプレ！？」

「ま、マスター、今スプレっていいましたか？」

「え？ああ……」

ぎょっとしているシェルにおびえているバレル……なんだ？こ

の空気は？
――――――
「通称、憑き人スプレ……戦闘能力に特化してますが、一人で走りがちなうえに彼女が天界にいたころ使えていた主は大怪我を負ってます」
「へぇ、そんなジンクスがある天使候補生なんだな～」
俺はシェルが話していたその話を半分ぐらいしか聞いていなかった。俺が向ける視線では犬と戯れる物静かそうな女の子が映っている。和む光景だ
「……こほん、師匠！」
「あ？な、何だ？」
その視界上に面白くなさそうな顔をしたシェルが姿を現す。
「スプレが師匠のことを主と呼んだ気がします」
ああ、そういえば話すのを忘れていたな……
「きっと、犬のことをいったんじゃないのか？」
「いえ、確実にあのスプレは師匠のことを主だとおもっています」
「あわわわ……」
バレルは完全におびえて俺にひっついて振動を俺に与えまくっている。
「そうはいってもな……」
オイデが名前も呼んでいないのになにやら封筒を持ってやってきた。新聞とかはよくもってくるのだが、封筒ははじめてだ。しかも、俺宛のようでオイデは座って待っている。
「ん？何だ？」
「封筒ですね、どこから……あ、師匠……それを開けては……」
言われたときには既に封筒を開けており、中には『権利を譲渡する』という書類に犬の肉球が押されていた。
そして、気がつけばスプレが近くにいたのだった。
「……これで、自分の主」

「え？」
犬も頷き、用は済んだとばかりにスプレと共に出て行ったのだった。
「あ、あわわ……」
バレルは俺にしがみついてはなれないし、シェルはため息をついていたのだった。
「……とりあえず、シェルは師匠が傷つかないように努力します」
「わ、私も……マスターのためにがんばります」
震える足を何とか立たせてそういったバレルに対して俺は首をすくめるしかなかった。
「実感わかねぇからな……」
――――――
「ここにいたのか？」
「……」
あれから母さんにスプレのことを話すと母さんは構わないわと言ってこの家に住むことを許可したのだった。
しかし、夕食時に完全に黙っているスプレについて俺は色々と母さんに放している途中で彼女は退出……難しい年頃なんだといっておいたら母さんは納得したのだが妹は兄さんに何がわかるのよ？ともっともらしい言葉を言われて反論できないでいた。バレルは震えており、シェルは面白くなさそうだった。
そして、俺は出て行ったスプレを追いかけていった結果、屋根の上にいる彼女を発見したのである。
「……あの二人と仲良くしてやってくれないか？」
「それ、自分に対しての命令？」
「いいや、お願いだ」
「……あの二人が自分のことを怖がっている、嫌っているから無理……」
表情変えずに沈む夕焼けを見ているスプレにどういった言葉をかけるべきか悩んでいる俺だったのだが、強引に話題を見つける。ジ

ョーカーについてのことだった。
「あ～あのなぁ、ちょっと……」
しかし、その話題を振る前に俺は上を見上げるはめとなった。
「って、あれは何だ？」
上空には何かが浮かんでいた。羊とヤギをたしたような感じの生命体で、俺とスプレを見ると、にやりと笑う。羊ヤギが笑った瞬間に俺たち二人は気がつけばぜんぜん違う場所にいた。そこは紫色の煙に囲まれている場所だった。
「……やられた」
「え？やられたってどういう意味だ？てか、ここはどこだ？」
「さっきの奴の頭の中……自分たちを取り込む気」
「こいつを知っているのか？」
「……自分はナイトメアと呼んでいる。天界にいたころからずっとこいつに追いかけられていた」
煙を見ているとどんどんと何か騎士のような形をとる。それは俺よりも1．5倍ほど大きい。
「……排除」
スプレは銃を取り出すとそれを相手に撃ち込む……だが、それは見事に貫通してどこかに消えてしまった。
「ぐあ！」
「！？」
弾丸は俺の右肩を打ち抜いた。
「……ど、どうなってんだ？」
穴は開いたのだが、血が流れない……そんなおかしい状態に陥っており、俺は混乱していたが……
「大丈夫？」
心配そうな顔をしているスプレに肩を押さえられると、混乱していた頭も冷静さを取り戻していく。
「……飛び道具が通用しないなら打撃は効くかも知れん！」
「あっ……」

俺は飛び出し、相手にけりを食らわしてみたのだが……

「あれっ？」

煙となり、体を貫通して……

「ぐおっ！！」

俺に戻ってきて見事に顔面へと俺がけったぐらいの威力のあるけりが戻ってきた。

「あいたた……」

振り下ろされそうになった剣をスプレが銃で受け止めようとするが……彼女の右肩に当たる。

しかし、彼女の右肩は切れず……そう、代わりに食らったのは俺だった。

第一章　第十二話（前書き）

??「あ～っと……ひ・ま・だ！ひ・ま・だ！めちゃくちゃひまだ！……一時期はやったフレーズ?で歌ったって何もないよ～……さて、そろそろ終わりも近づいて?きました。どんな結末かはわかりませんが、皆さん、期待して?呼んでください！」

第一章　第十二話

十二、

「ぐぅ……」

右手に一瞬だけ痛みが走る……

「……右手、なくなっちまったな……」

俺の目の前に右手が転がっていたように見えたのだが、それは霧消した。痛みがまったくないといって言いし、感覚がなんとなく夢っぽかった。

「ナイトメア……悪夢か……スプレ、じゃ、ここって夢の中なのか？」

「……あいつが見ている夢の中……」

成る程、だから頭の中だって言ったのか……しっかしまぁ、気味の悪い夢を見るもんだ。俺に何か恨みでもあるのだろうか？

「……ずっと、これまでずっと……こいつに主が倒されていった」

「ん？主が夢の中に取り込まれたのか？」

「違う、自分だけがここに取り込まれて……そのうちにやられた」

淡々としたその言葉はただ事実を述べているだけだった。

「……そうか……だがな、今度は大丈夫だとおもうぞ？」

「……何故？」

そこまで敵は迫ってきている。今度は確実にスプレの胴体を真っ二つにして俺が真っ二つにされる番だが……

「なぁに、隠れてこそこそと俺たちを見ていた二人組みがいるから、今頃どうにかしてくれているさ」

――――――

「ま、マスターがあいつに取り込まれてしまいましたよ～」

「師匠なら大丈夫だ……それより、あいつを倒すことを考えろ」

「りょ、了解！」

シェルは相手を睨みつけ、大地を踏みしめて飛び上がり、バレルは光の矢を放つ。
「……見せてやろう、お前に！私たちのコンビネーションを……
…うわっち！」
飛び上がったシェルのすぐ右を矢が通り過ぎる。
「危ない！」
「ご、ごめん！」
自由に姿勢を制御しながら足場のない空中で相手に拳を叩き込む。
そして、光の矢は動くことの出来ない羊ヤギへと刺さっていく……
……
「これで！」
「終わりです！」
同時に放った一撃があたり、羊ヤギは光に包まれた…………
――――
「な？言ったろ？」
気がつけば俺たち二人がいる場所はスプレと初めてあったあの公園だった。
「…………う」
「う？」
う〇こか？とおもってしまった俺は空気が読めていないない駄目な奴だ。
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁあぁああああん！！！」
スプレはいきなり泣き出し、俺はなだめようとして………つらかったのだろうとおもって抱きしめてやった。
「う、ううう………うわぁぁぁぁぁん！！」
「泣くなよ……てか、なんで泣いているんだ？」
「うう……ひぐっ……」
スプレの手も俺を抱きしめるようにして泣いている……
――――
結局、彼女は泣きつかれたのか寝てしまい、俺はそんなスプレを

背負って家に帰宅するはめになった。既にお空にはまん丸のお月様が輝いていて汗で体がべとついている。
「……ふぅ、ただいま」
「ま、マスター！お帰りなさい！」
「師匠、よくぞご無事で……」
二人は俺に引っ付いてきて俺は倒れそうになったのだが何とか踏ん張ることが出来た。
「……なぁ、二人とも……ちょっと重要な話があるんだ」
「……なんですか？」
「なんでしょうか？」
俺は重要な話を二人に耳打ちして、いやいやながらも承諾させたのだった。

――――――

「……」
失態を見事に主の前でさらしてしまった。そして、主が寝ているうちにこの家を去るつもりだった。ずっとついてきていたあの悪魔を倒すことは出来たのだが、自分ひとりで倒すつもりだったのだが倒されてしまったのだ。
「……」
気がつけばベッドに寝かされており、主の母が言っていた部屋のようだ……
「マスター」
「師匠」
左右にあの二人がおり、それぞれがそれぞれ、きっと都合いいことを想像しながら寝ているのだろう……
たって部屋を出ようとするのだが……立てない。
「！」
気がつけば自分の両手を左右からあの二人が掴んでいる。動けない状態だった。
「……」

体をひねったりしたのだがどうしてか、とれない。足を動かそうとしたのだが縛られており、こちらも駄目だった。
「ふぅ……」
ため息が自然と口から漏れる。
「どうした？動けなくて厄介か？」
「！？」
気がつけば近くに主の姿がある……
――――
先ほどから逃げようと必死になっていたスプレに俺は声をかけていた。
「……主、ほどいて欲しい」
「駄目、お前逃げるだろ？」
黙りこむスプレに俺は告げた。
「……お前、自分の体を見てみろよ？ぼろぼろだぜ？」
いまさら気がついたのか自分が包帯ぐるぐる巻きになっていたことに驚いていたようだった。
「あいつの攻撃、受けたの本当はお前だからな……ま、俺も右肩と顔面けがしてたようなんだが……お前のほうが重傷だ。とりあえずその怪我が治ってここを出て行っても大丈夫だろ？」
「自分の怪我は……大丈夫、主は？」
「俺か？俺は大丈夫だ。右肩撃ち抜かれただけだし……お前の銃もあんまりたいしたことないな？痛くないからな」
そういってみると相手は顔を上げる。
「……次までには威力を上げておく」
それがスプレなりの冗談だということに俺は気づき、苦笑する。
「お手柔らかに頼むよ」
「……一撃で昇天するぐらいまでに威力を上げておく」
そうかいと俺は呟いて立ち上がる。
「じゃ、お休み……スプレ」
「……てほしい」

「え？」
「朝までここにいて欲しい、主……たとえ、身勝手なわがままな願いだとはわかっていても」
「……わかった」
俺は立ち上がろうとしていたのをやめて座る。そして、朝までずっとスプレの昔のことを静かに聴いていたのだった。

第一章　第十三話（前書き）

??「え～次回が最終回……？え？嘘！私の名前はどうなってるの！最終回でわかるってこと？そ、そうじゃない？それってどういうことよ！ちょ、ちょっと！降板って何よ！ちょ、う、訴えてやる～（どこかに連れて行かれる）」

第一章　第十三話

十三、

夜空には満天の星空……

「綺麗ですね～」

「ああ、そうだな……」

俺の隣にいるのはバレル……そして、その後ろには他の二人がテントを整備している。

「雪人、実に君は暇そうだね？」

「まぁな、だってほかにすることがないだろう？」

あたり一面、木々が生い茂っており、ここだけが月光を受け入れている場所なのだ。

「……俺たち、迷子……いや、遭難しているんだから」

――――――

「え～皆さん、連休だからと言って羽を伸ばし過ぎないようにしてください」

担任のその言葉に俺たちは確かに頷いた。全員、この計画を発案した誠の席にやってきていた。

「さて、今日から山登りに行くんだけど……皆、山をなめてはいけないよ」

「わかってるって」

過去に一度、遭難した経験のある俺はそのことを熟知……とは言わないまでもある程度は理解していた。徐々に暗くなっていく周囲に見知らぬ土地……迫ってくるような感じを受ける木々たちに見知らぬ獣の声。次の日、俺は気絶している状態で見つかったのである。

「大丈夫です！私がいますから！」

「……俺は一番お前が不安なんだがな」

ゴミ箱を探検しようとしていたのか知らないがゴミ箱から抜けな

くなってしまったのはこいつの恥部だろう。これで天使になるって言うのだから相当バレルの頭の中はくすんでいるのだろうか？
「ま、その点ではシェルは大丈夫だよな？」
俺の問いに彼女は自信満々と言った感じで頷いた。
「まぁ、山篭りなら三日ほどしたことがあります」
三日ほど山篭りをしたぐらいで大丈夫なのだろうか？とちょっとした疑問を覚えたのだがこの格闘家ならそれこそ熊も倒してしまうかもしれんからな。
「で、そっちの無口ちゃんも大丈夫なのか、雪人？」
「スプレ、問題はないよな？」
「……毛虫は駄目、それ以外は大丈夫」
そういって俺を見るスプレ……成る程、苦手なものだってあるのか……
「あ、あ！私も辛いものが苦手です！」
「え、え～と、師匠！シェルは苦手なものなのありませんよ？」
何を張り合っているのかわからんが他の二人もそんなことを言い出す。
「……っとに大丈夫かい？雪人、この三人からは絶対に目をそらさないでくれよ？」
「……わかった。努力する」
こうして、俺たちは五人は山に行ったのだが……
山に登って数十分後、早速迷った。
「バレル、なんだかどんどん獣道に入っていってないか？」
「え？でも地図どおりに……Sが下ですよね？」
「！？」
バレルに地図を渡したのが間違いだっただろう……幸いなことに誰もかけていないのが良かったことなのだろう。
「あ～こほん、諸君、急いで来た道を……」
べきっ！！！

「あ、倒木が……」
戻ろうとしたとき、ちょうど木が俺たちの行方をさえぎる。
「まぁ、この程度ならシェルが飛べます、師匠！ちょっといってきます！」
そういったシェルの目の前に岩が転がってくる。

ごろごろごろごろごろ……どごん！！！

うずたかく積まれてしまった岩石の集まりにシェルは首をすくめる。
「さすがにこれは……無理ですね」
「そうか……まぁ、別の道に出るまで上れば大丈夫だよな？」
俺がそんなことを誠に尋ねると奴も頷いてくれた。
「ああ、きちんと家の人たちに入ってきているからね……期間を過ぎても帰ってこなかったらすぐに警察に連絡してくれるように頼んでおいたよ」
念の入れようはすごかったのだが、まぁ、この位しておいたおかげで今回は助かったのである。

――――――

「星空が綺麗だよな～」
「そうですね～」
上記のようなことがあり、俺は……いや、俺たちは遭難しているのである。そして、とりあえず開けた場所にテントを張って一夜を過ごすことにしたのだ。
「現実逃避なんて二人ともいいから、さっさと手伝ってくれよ」
「だってさぁ、バレルほっとくとまた泣き始めるぞ？」
迷子になってしまったのは自分の所為だ、私が腹を切って……と何故か切腹を申し出てきたので俺はそれを急いで止めてお空にきらめくお星様たちを見せたのだった。それにいたく感動したのか切

腹をやめてバレルは星空を見入っているのである。
「師匠、出来ましたよ！」
「……会心の出来」
後ろを振り返るとスプレ&シェルの初心者にしては上手なテントが出来上がっていた。はぁ、うまいものだな～
「ほら、シェルとスプレがテント張ってくれたからはいるぞ？もう真っ暗だし……」
こんなに平らな土地を探すのに結構な時間を割いてしまっているので既にあたりは真っ暗なのだ。
「私って、どうしてこんなに無力なんでしょうか……ドジだし……」
おおっ！自分のことがドジだと認識していたのか～……っと、普段の俺だったら思っていたかもしれないが、今日のバレルにそんなことを言うのはさすがに刻であろうということで、俺はこほんとせきをしてバレルの肩を静かに掴む。
「何言ってんだ、ドジならここまでこれないだろ？今頃躓いてがけから落ちてるぜ？」
「……そうですか？」
「そうそう、誠、そうだよな？」
「そうだね、今頃人類滅亡のカウントダウン栄えある一番目って感じで新聞に載っているだろうね」
励まし方がおかしいのだが、そこのところは誠仕様だ。無茶振りを見事に返してくれたのを素直にありがとうと思おう。
「……だからさ、バレル、明日がんばればいいだろう？」
バレルの頭に手を載せ、俺はそんなことを言う。それがどんなに無責任で場合によっては自分も責任を負わなくてはいけないかもしれないという言葉なのだが……俺はとりあえずバレルを元気にしたかったのである。
「師匠、早くバレルを連れてきてください」
「ほら、お前の姉ちゃんもお前を呼んでるぞ？……スプレだっ

てなぁ？」
　いつの間にか俺に肩車されているような感じになっているスプレは口を開く。
「……ご飯の味見、よろしく」
「……二人とも……わかりました！私に任せてください！」
　元気を取り戻したようで、俺は安心した。テントへと突撃していったバレルの後姿を見ながらつい、ため息をこぼしてしまう。
「シェル、スプレ、ありがとうな」
「いえ、師匠のほうこそすみません……バレルが迷惑をかけてしまって……」
　スプレを引き摺り下ろそうとしながら俺にそんなことを言ってくれる。こんな生活がずっと続くといいなぁと思っていた俺だったが、世界は常に回っていた。

第一章　最終話（前書き）

??「あ～あぶねぇ！名前がこのままでもいいから出させてくれって言ったら出してもらえた……こほん、この小説を読んでくださった方、ありがとうございます……別に殴り合いなどありませんでしたが、この小説を完結させることが出来ました。えっと、実のところ第二章も書くつもりだったそうなのですが……別の小説、そうですね、名前は……（カンペを確認しながら）『月ヲ喰フ者』で続編をやるそうです。ではでは、今までありがとうございました！そっちこそこの??が登場するらしいので、ファンだったか、絶対に読んでね！」

第一章　最終話

十四、

「ん～……トイレ」

俺は夜中にトイレに行きたくて目を覚ましてしまった。外は暗くて怖いのだが、そうも言っていられない……立ち上がり、テントの外に出る。

「うをっ！？」

テントを出ると緑色の淡い光に包まれた女性が立っていた。その女性には見覚えがあり、俺がバレルをゴミ箱から出したときにいた女性だった。今回も、その女性は俺から見て反対方向に立っており、さかさまの顔は今回は笑っていた。

『お勤め、ご苦労様』

「は、はぁ……」

『お話があるんだけどよろしいかしら？』

「え～と、ちょっとトイレに行かせてもらいます」

相手を待たせておくのもなんだが、このままでは確実にもらしてしまう。俺は木陰に入って立ちしょんを終えた。

「え～と、それで話とは？」

『終わりを告げにきました』

「終わり？」

俺はわかっていながらも惜しむかのように……いや、違うことの終わりを求めて彼女へと聞き返した。

『この天使昇格試験……光翼閃輪偽天争です』

「……」

やっぱりか……と俺は思いながらため息をつく。もう、あの三人は俺の前から姿を消してしまうのだ。

「で、俺のところにいたあの三人は天使になれるんですか？」

『勿論……それにもう残っているのはあの三人だけです』

驚愕の事実を言われて、俺は言葉を失った。
「あ、あの三人だけ？どういうことなんですか？」
『私は女神ではないのですけど……女神様が放ったジョーカー……偽天使に残りは倒されて天界に戻ってきています。皆さん寝ている間にやられちゃったみたいで驚いた顔をしている人が半数近くですけどね』
つまり、あの三人は見事に生き残ったというわけか……
『まぁ、そのジョーカーもこちらへと向かってきています。いえ、あなた方の周りに既に潜んでいます。簡単に言うならあなた方が寝静まるのを待っていたといっていいでしょう。不自然な倒木に岩が転がってくることなんてありません』
近くの茂みからガサリという音が聞こえてくる……
「え？ご、合格って言ったのにジョーカーが来るってどういうことですか？」
『どうやら、ジョーカーも馬鹿ではないようですね……人間界と天界を繋ぐ時間の間にあの三人を倒そうと考えているようです。ああ、やられちゃった取り消しです』
成る程、それは確かに頭がいい……
「ええっ！それじゃもしかしたら合格にならないってことですか！？」
『その通りです……あら？あなたが二体目のジョーカーだったんですか？』
「え？」
ガサリという音が段々近づいてきて……ズボンの右ポケットが光り始める。
「あ、これってバレルからとったあのときのジョーカーのカード？」
『ええ、実は二体目のジョーカーは天使にお願いしようとしていたのですが、どうにも使い方を誰も知らなかったようですね？』
「と、とりあえず……このカードがあればジョーカーと戦えるということですか？」

俺は淡くひかる女性に尋ねる。
『ええ、ジョーカーとまったく同じ力を所有しているカードです。それに、あなたはジョーカーの素質がおありのようですし……ジョーカー初心者といえど、対等に戦えます。あの三人を天使にしたいのなら時間を稼いでください』
こちらも全力を尽くしますといって彼女は消え去った。
「……」
俺の目の前に現れたジョーカー……月光が照らすも、その存在は闇に覆われているようだった。
「！」
俺を見て、動きを止める。どうやら、ジョーカーのカードに反応しているようだ。
「かかってこいや！！」
俺の挑発に相手はのることなく、まっすぐテントへと向かっていく。
「逃げるのかよ！」
相手の前に回りこみ、押さえ込む。
「！？」
相手は驚いたように俺を押しのけようとするが、どうやら俺はまったく同じ力を持っているようで見事に動かなくなった。
「……ま、マスター！」
後ろからバレルの声がしており……だが、俺は相手と取り組み合っており振り返ることは出来ない。
「バレル、今までありがとう……っと、まじめな天使になるんだぞ？……扉が開いたんなら早く行け！」
やっぱり、ジョーカー暦が短いからなのか、俺は徐々に押され始めている。
「そ、そんな！マスターをおいていけません！」
「おいおい、俺を天界に連れて行く気か？くっ……っと、俺のことを見守ってくれればそれで結構だ！早く、行け！」

闇を纏ったジョーカーの姿が未だに確認できないのだがめちゃくちゃ怖い……トイレに言っておいて良かった気がする。
「師匠！だ、大丈夫ですか！今加勢に……」
「おっと、シェル……お前がジョーカーの話をしてくれてよかったぜ？そのおかげで、今まともに時間稼ぎが出来てるんだ」
「こ、これがジョーカー？」
シェルは驚いたようにそう呟いている……
「ちなみに、俺もジョーカーだぞ」
「し、師匠……う、嘘ですよね？」
「いいや、ジョーカーは本当はバレルがやるはずだったんだ……だが、途中で俺がその……なんだ、よくわからんがジョーカーに変わっちまっていたらしい」
「……」
絶句してしまったシェルに俺はかける言葉がない。
「お前なら、わかってくれるよな？扉が開いてるんならさっさとバレルをつれて天界に戻れ！そろそろ手がしびれてきてギブアップを求めたい！」
「わ、わかりました……ほら、バレル！」
「い、いやです！」
バレルはどうやら踏ん張っているようなのだが……
「……シェル、なんとしてでも連れて行け」
「すいません、師匠……」
「い、いや……」
二人の気配が見事に消え、俺が相手を押さえるのもそろそろ限界のようだった。
「……主、加勢は？」
「必要ない、お前も早く行け」
スプレの声がすぐ近くで聞こえてくる……
「わかった……天使にしてくれて、ありがとう」
「気にするな、お前が一番手のかからん奴だった……まぁ、短い

間だけだったがな」
　さようならとスプレは呟き……とうとう三人全員の気配が消えてしまった。まさか、こんな風な別れ方をするとは思っていなかったのだが……あの三人が立派な天使になってくれればそれでいいだろう。
『見事にあの三人は天界に戻ってきましたよ』
「そりゃどうも……で、俺はいつまでこいつとこうしていないといけないんっすか？」
『いつでも……いったんはなれ、バレルが落としてしまっていった光の矢を使ってください。ジョーカーは間違いなくあなたを殺そうとします』
「……わかった」
　俺はジョーカーからはなれ、近くに転がっていた光の矢を掴んだ。相手もどこからか似たように鋭い槍を取り出して俺へとつっこんできた。
「……！！！」
「くそっ……！！！」
　つっこみ、両方とも避けると思ったのだろうか？見事に俺とジョーカーは……

　相打ちとなった。

　体から何かが抜けていく気がしていく……紅い液体が俺の足をぬらしていく……後ろを振り向くと、黒いやりは見事に俺を貫いており、俺はもう……
「ごふぁ……」
　口からも似たような紅い液体が吹き出し、力がはいらない。
「……」
　ジョーカーも黒い霧が噴出していき……力を失っていくのが俺にもわかった。

「ま、まぁ……ごふ……相打ちってのも……」
悪くないかもしれないといおうとして俺たちの体は地面に転がったのだった。
――――――
再び光翼閃輪偽天争は例年通り行われる……
一つの書類には軽く『生野……』と書かれており、この書類を手にした天使はそのものの場所へと向かうのだろう……
バレルと雪人が一緒にプレイしていた恋愛シュミレーションゲームは問題となり、今では伝説のゲームとなっていた。
第三十七回光翼閃輪偽天争を合格した三体の天使は生きた伝説となっていた……ただ、三人は人間界とはまったく関係の無い場所で動くことになっているので彼らが慕っていた一人の人間のことを知る由がなかった。
一年後、とある公園で一人の青年が呟く。
「また……この年になったな……なつかしいもんだ」
～ＥＮＤ～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0120e/

光翼閃輪偽天争！

2010年10月8日15時47分発行